

挽歌の呼称表現と志向性

津 田 大 樹

一

挽歌は人物の死に際して詠まれた歌である。古代の社会において挽歌が詠まれたのは、詠むことの意義や社会的な機能があつたからである。本稿では挽歌の呼称表現の特質を検証することによって、挽歌が何のために詠まれたのか、誰に向けて詠まれたのかという歌の志向性について考察する。

二

古代の資料には、人物の死に際して遣された者が発した言葉を記した事例がある。その中に次のような例がある。

① 景行紀四十年

時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓日嶺に登りて、
南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾孀はや」とのたまふ。

時日本武尊、毎有顧弟橘媛之情。故登碓日嶺、而東南望之三歎曰、吾孀者耶。

② 景行紀四十年

既にして能褒野に崩りましぬ。時に年三十。天皇聞しめして、寢、席
安からむや。食、味甘からず。晝夜喉咽びて、泣ち悲びたまひて擗搯ちた
まふ。因りて、大きに歎きて曰はく、「我が子小碓王、昔熊襲の叛きし日に、
未だ總角にも及らぬに、久に征伐に煩ひ、く」

③ 仁徳即位前紀

既而崩于能褒野。時年卅。天皇聞之、寢不安席。食不甘味。晝夜喉咽、泣悲
举笛。因以、大歎之曰、我子小碓王、昔熊襲叛之日、未及總角、久煩征伐、

時に大鷦鷯尊、太子、薨りたまひぬと聞して、驚きて、難波より馳せて、菟
道宮に到ります。爰に太子、薨りまして三日に経りぬ。時に大鷦鷯尊、擗搯
ち叫び哭きたまひて、所知知らず。乃ち髪を解き屍に跨りて、三たび呼ひて
曰はく、「我が弟の皇子」とのたまふ。乃ち應時にして活でたまひぬ。

時大鷦鷯尊、聞太子薨以驚之、從難波馳之、到菟道宮。爰太子薨之經三日。
時大鷦鷯尊、擗搯叫哭、不知所如。乃解髮跨屍、以三呼曰、我弟皇子。乃應
時而活。

④ 安康紀 元年二月

天皇、根使主が讒言を信じたまふ。則ち大きに怒りて、兵を起して大草香皇子
の家を圍みて、殺しつ。是の時に、難波吉師、日香蚊父子、並に大草香皇子
に仕へまつる。共に其の君の罪無くして死にたまひぬることを傷みて、則ち
父は王の頸を抱き、二の子は各、王の足を執へて、唱へて曰はく、「吾が君、
罪無くして死にたまふこと、悲しきかな。我父子三人、生きてまししときに
事へまつり、死にますときに殉ひまつらずは、是臣だにもあらず」といふ。
即ち自ら勿ねて、皇戸の側に死にぬ。

天皇信根使主之讒言。則大怒之、起兵圍大草香皇子之家、而殺之。是時、難
波吉師日香蚊父子、並仕于大草香皇子。共傷其君无罪而死之、則父抱王頸、

二子各執王足、而唱曰、吾君无罪以死之、悲乎。我父子三人、生事之、死不殉、是不臣矣。即自刎之、死於皇尸側。

⑤ 雄略即位前紀

大泊瀬天皇、弓を彎ひまかひ馬を驟いっばせて、陽ひらり呼びひして、「猪有り」と曰ひて、即ち市邊押磐皇子を射殺したまふ。皇子の帳内とね佐伯部賣輪うりわ、更の名は仲手子なかつちこ、屍こゝろを抱かぎて駭おどけ悔くて、所由ゆゑを解とらず。反側こゝろび呼び呼よびて、頭脚かぶたしに往還かよふ。

大泊瀬天皇、彎弓驟馬、而陽呼、曰猪有、即射殺市邊押磐皇子。々々帳内佐伯部賣輪、更名仲手子。抱屍駭悔、不解所由。反側呼號、往還頭脚。

①は景行紀でヤマトタケルが碓氷峠に立ち、オトタチバナヒメを偲ぶ場面、景行記にも、ほぼ同様の記述がある。「吾婦はや」の「くはや」について、宣長は「波夜は、其物を思ひて深く歎息辭なり」（『古事記伝』）と説いている。

『時代別国語大辞典上代編』にも、「文末にあるときは体言について、極限的な状況にある対象への強い感動をあらわす。（中略）上代に限れば、既にないもの・まさになくなるうとするものへの愛惜といえる。」と説明されている。

「くはや」は、失われたものへの強い愛惜、感動を表すもので、①の場合、亡くなったオトタチバナヒメを偲び、強い愛惜の思いを込めて呼びかける言葉となっている。②はヤマトタケルの死に際して、父景行が、「我が子小碓王」と呼びかけながら、その死を悼んでいる。

③では大鷦鷯尊が弟皇子の死を嘆き、その屍に跨って「我が弟の皇子」と三たび叫ぶ。すると弟皇子は蘇生する。このような場合の、「我が弟の皇子」という呼びかけの言葉に、大鷦鷯尊の驚嘆や悲嘆といった、率直な思いが込められていることは確かだが、それと併せて、弟皇子が蘇生するという展開からして、ここには復活再生を願う儀礼的所作が反映されていると考えられる。

④では、殺された大草香皇子おほくさかのみこに仕えていた父子が、皇子の屍に取りすがつて、「吾が君」と呼びかけている。⑤でも、殺された市邊押磐皇子の帳内であった佐伯部賣輪うりわがその屍に取りすがっている。ここにはその言葉が記されていないが、「反側こゝろび呼び呼よびて、頭脚かぶたしに往還かよふ」とあることから、この場合にも、前の場合と同様に、屍にとりすがりながら、死者への呼びかけがなされていることが読み取れる。

右に示した①～⑤の例では、遺された者が死者に向けて呼びかけるかたちで言葉を発している。また、蘇生を期する儀礼的所作を読み取ることもできる。こうした呼びかけの言葉は、心情的にも、また習俗信仰の面においても、遺された者の発言として本源的な性質を持つと考えられるのではないだろうか。そして、こうした言葉の志向性は、歌の場合にも共通していると考えられる。

⑥ 西郷信綱『古代人と死』（平成11年2月、平凡社）

とにかく死体を安置した喪屋では女たちによりこうした歌舞が反復、演じられたはずである。だが、歌舞だけではない。歌舞と並んで慟哭儀礼も不可欠なものであった。発生的には、慟哭の音が言語的に分節化して悲歌を生み出すに至ったとさえいえるわけで、両者はその後もずっと共存していたようである。（中略）哀哭は一種の祭式行為であり、従って女たちの悲歌もたんなる独詠ではなく、死者への呼びかけを含むものであったといえる。

⑦ 酒井正子『哭きうたの民族誌』（平成17年6月、小学館）

琉球弧の葬送歌では、必ず死者の名を呼び、泣き、語りかける。死者に対しては、「声」に出さなければ思いが届かないとされているのだ。

西郷信綱氏の論⑥では、古代の喪葬儀礼における「悲歌」が、「死者への呼びかけを含むものであった」と説かれている。また、酒井正子氏の論⑦では南島の葬送歌の詳細な調査を踏まえた上で、葬送歌では「必ず死者の名を呼び、泣き、語りかける」と報告されている。

挽歌においても死者の名を呼ぶことは歌われる。

⑧ 柿本朝臣人麻呂、妻が死にし後に、泣血哀慟して作る歌二首（併せて短歌）

く我が恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もありやと 我妹子が 止まず出で見し
 軽の市に 我が立ち聞けば 玉だすき 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉梓
 の 道行き人も 一人だに 似てし行かねば すべをなみ 妹が名呼びて袖を振り
 つる
 （巻2二〇七）

⑨ 恐みと 告らずありしを み越路の 手向に立ちて 妹が名告りつ

泣血哀慟歌⑧では妻を失った男が妻の名を呼んで袖を振る。ここにも古代信仰に基づいた儀礼的所作を認めることができる。また、死別の場合に限らず⑨の中臣宅守が境界の坂に立って、妹の名を口にした場合なども同様に理解できる。

しかし、これらの表現は呼びかけを歌っていないが、間接的説明的な叙述となっており、歌の言葉自体は呼びかけの表現ではない。泣血哀慟歌の歌群全体の表現には「第三者への眼」を認めることができると思われてきた。

⑩伊藤博『万葉集釈注』

この歌、石見相聞歌(2-131-40)などと同様、人麻呂の体験に根ざす語り歌で、後宮の女性を中心とする宮廷人に披露された歌と思われる。歌が長篇であるのもさることながら、表現が「天飛ぶや軽の道は 我妹子が里にしあれば」というように、のつけから**第三者の目を意識して歌い起こされている**。同じように、「玉梓の使の言へば」「音のみを聞きてありえねば」「輕の市に我が立ち聞けば」「ひとりだに似てし行かねば」等々、「已然形十ば」の形には、**すべて第三者への眼がある**といつてよい。

⑧の長歌末尾でも、男が妻の名を呼んだと歌われてはいはいるが、その表現「妹が名呼びて 袖そ振りつる」は二次的で説明的な叙述であり、先掲の「吾孀はや」「我が弟の皇子」などの直接的な呼びかけとは明らかに質の異なるものである。泣血哀慟歌の表現からは、死者への呼びかけを直接的に聞き取ることはできない。

挽歌はなぜ歌われたのか、誰に向けて歌われたのかという視点で考えてみると、泣血哀慟歌のように創作性や虚構性を伴う挽歌や、公的儀礼的な挽歌などでは、「第三者への眼」が強く組み込まれている。

私的な挽歌においても、回想性が強く、独自のである場合などがあり、歌が死者に向けられるという方向性が、挽歌の基調とはなっていないと思われる。

また、対称(二人称)の呼称表現(君、背、妹など)のうち、最も直接的な呼びかけとしての性質を持つのは「汝」(ナ・ナレ)であるとされる。伊藤博氏はこの「汝」が直接的呼称であり呼びかけの性質を持つことを指摘する(「相手を呼ぶことば」『万葉集の表現と方法』下、昭51年10月 塙書房)。そこで、「汝」の用例を

検してみると、『万葉集』に約七〇例を数えるが、これが挽歌の中で死者に向けて使われた例はない。このことにも、挽歌がその基調として死者に向けられたものではないという傾向が示されているのではないだろうか。

三

挽歌の呼称表現で死者への呼びかけと見なせるものはないだろうか。これを検してみると、語法としては、死者を指示する呼称表現が体言止め、または感嘆詞が付いたかたち等で句切れとなる用例が目される。

⑪ 天皇の崩りましし時に、婦人の作る歌一首「姓氏詳らかならず」

うつせみし 神に堪へねば 離れ居て 朝嘆く君 離り居て 我が恋ふる君
玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱く時もなく 我が恋ふる 君そ昨
夜 夢に見えつる (巻2-150)

⑫ 天皇の崩りましし後の八年の九月九日、奉為の御齋会の夜、夢の裏に習ひ賜ふ御歌一首

明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし 我が大君
高照らす 日の皇子 いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の国は 沖
つ藻も なみたる波に 塩気のみ かをれる国に うまこり あやにともし
き 高照らす 日の皇子 (巻2-162)

⑬ 柿本朝臣人麻呂、泊瀬部皇女と忍坂部皇子とに献る歌一首(併せて短歌)

反歌一首
しきたへの 袖交へし君 玉垂の 越智野過ぎ行く またも逢はめやも (巻2-195)

右、或本に曰く、「河島皇子を越智野に葬る時に、泊瀬部皇女に献る歌なり」といふ。日本紀に云はく、「朱鳥五年、辛卯の秋九月己巳朔の丁丑浄大参皇子川島薨ず」といふ。

⑭ 弓削皇子の薨る時に、置始東人が作る歌一首(併せて短歌)

やすみしし 我が大君 高光る 日の皇子 ひさかたの 天つ宮に 神ながら
神といま せば そこをしも あやに恐み 昼はも 日のことごと 夜
はも 夜のことごと 伏し居 嘆けど 飽き足らぬかも (巻2-204)

⑮ 吉備津采女が死にし時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首へ併せて短歌

秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる児らは いかさまに 思ひ居れか
栲縄の 長き命を 露こそば 朝に置きて 夕には 消ゆといへ 霧こそば
夕に立ちて 朝には 失すといへ 梓弓 音聞く我も おほに見し こと悔
しきを しきたへの 手枕まきて 剣大刀 身に副へ寝けむ 若草の その
夫の子は さぶしみか 思ひて寝らむ 悔しみか 思ひ恋ふらむ 時ならず
過ぎにし児らが 朝露のごと 夕霧のごと (巻2二一七)

⑯ 讃岐の狭岑の島にして、石の中の死人を見て、柿本朝臣人麻呂が作る歌

一首へ併せて短歌

反歌二首

⑰ 沖つ波 来寄する荒磯を しきたへの 枕とまきて 寝せる君かも (巻2二二二)

⑱ 上宮聖徳皇子、竹原井に出遊でます時に、龍田山の死人を見て悲傷して
作らず御歌一首
家にあらば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせる この旅人あはれ
(巻3四一五)

⑲ 石田王の卒る時に、丹生王の作る歌一首へ併せて短歌

なゆ竹の とをよる皇子 さにつらふ 我が大君は こもりくの 泊瀬の山
に 神さびに 齋きいますと 玉梓の 人そ言ひつる 逆言か 我が聞きつ
る 狂言か 我が聞きつるも 天地に 悔しきことの 世間の 悔しきこと
は 天雲の そくへの極み 天地の 至れるまでに 杖つきも つかずも行
きて 夕占問ひ 石占もちて 我がやどに みもろを立てて 枕辺に 齋瓮
を据ゑ 竹玉を 間なく貫き垂れ 木綿だすき かひなに掛けて 天なる
ささらの小野の 七ふ菅 手に取り持ちて ひさかたの 天の川原に 出で
立ちて みそぎてましを 高山の 巖の上に いませつるかも (巻3四二〇)

⑳ 天平元年己巳、撰津国の班田の史生文部龍麻呂自ら経きて死ぬる時に、
判官大伴宿祢三中が作る歌一首へ併せて短歌

反歌
昨日こそ 君はありしか 思はぬに 浜松の上に 雲にたなびく
(巻3四四四)

いつしかと 待つらむ妹に 玉梓の 言だに告げず 去にし君かも

⑳ 天平三年辛未の秋七月に、大納言大伴卿の薨ずる時の歌六首

はしきやし 榮えし君の いましせば 昨日も今日も 我を召さましを
かくのみに ありけるものを 萩の花 咲きてありやと 問ひし君はも
(巻3四五四)

㉑ 十六年甲申春二月、安積皇子の薨ずる時に、内舍人大伴宿祢家持が作る

歌六首

かけまくも あやに恐し 言はまくも ゆゆしきかも 我が大君 皇子の尊
万代に 食したまはまし 大日本 久邇の都は うちなびく 春さりぬれば
山辺には 花咲きををり 川瀬には 鮎子さ走り いや日異に 榮ゆる時に
逆言の 狂言とかも 白たへに 舍人装ひて 和東山 御輿立たして ひさ
かたの 天知らしぬれ 臥いまるび ひづち泣けども せむすべもなし
(巻3四七五)

反歌

⑳ 我が大君 天知らさむと 思はねば おほにそ見ける 和東山
(巻3四七六)

かけまくも あやに恐し 我が大君 皇子の尊 もののふの 八十伴の緒を
召し集へ 率ひたまひ 朝狩に 鹿猪踏み起こし 夕狩に 鶉雉踏み立て
大御馬の 口抑へとめ 御心を 見し明らめし 活道山 木立の繁に 咲く
花も うつろひにけり 世間は かくのみならず ますらをの 心振り起こ
し 剣大刀 腰に取り佩き 梓弓 鞆取り負ひて 天地と いや遠長に 万
代に かくしもがもと 頼めりし 皇子の御門の 五月蠅なす 騒く舎人は
白たへに 衣取り着て 常なりし 笑まひ振舞 いや日異に 変はらふ見れ
ば 悲しきろかも (巻3四七八)

㉒ 羈旅の歌

名児の海を 朝漕ぎ来れば 海中に 鹿子そ鳴くなる あはれその鹿子
(巻7一四一七)

㉓ つのさはふ 磐余の山に 白たへに かけられる雲は 皇子かも
(巻13三三二五)

㉔ 備後国の神島の浜にして、調使首、屍を見て作る歌一首へ併せて短歌

反歌

家人の 待つらむものを つれもなき 荒磯をまきて 伏せる君かも

(卷13三三四一)

初めにあげた⑩の「朝嘆く君」「我が恋ふる君」は「君」が体言止めで句切れをなす語法となっており、このような場合には、呼びかけの表現として読むことができるのではないかと考える。また、⑩「寝せる君かも」⑪「この旅人あはれ」⑫「問ひし君はも」などのように、感動詞や、感嘆の助詞がついて句切れをなしているような場合も、呼びかけ表現としての性質を認めることができると考える。

そこで改めて⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿をみると、ここには、行路死者を歌うもの、自死や水死などの異常死者を歌うもの、墳墓への埋葬を歌うもの、殯や葬送などと直接に関わって歌われたものなどの、顕著な傾向が認められる。先に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨の資料で、死者への呼びかけの言葉の事例を見たが、ここでも、屍を目の前にして、また実際に屍に取りすがって言葉を発するという場面が見られた。挽歌の場合にも、目の前に屍の存在することが、死者に呼びかける表現を成り立たせる条件の一つとしてあったと考えることができる。

なお用例の中で、⑩は明らかに屍の存在しないところで詠まれている。それは、この挽歌が、天武崩後八年を経てから詠まれているからである。しかし「夢の裏に習ひ賜ふ」という事情をもつこの歌は、逆にこのような呼びかけ表現を用いることによって、亡夫天武の姿を目の前に見るように表現されていると考えられる。「やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子」という表現は、宮廷讃歌にも用いられる表現で、行幸先の公的な場で、多くの従駕の人々を前にして献呈されるという場合にも、明らかに目の前の「大君」の存在を踏まえた表現として用いられている。挽歌にこの表現を用いたということは、そのような宮廷讃歌の場合と同じように、眼前の「大君」に歌いかけるような表現がとられているということになる。

四

遺された者が死者に対して言葉を向けることは、古代信仰に基づく行為であるとともに、むしろそれ以前に、遺された者の真情に発する行為でもあると考えられる。こうした言葉は、まっすぐに死者へと向けられた表現となるが、それは逆に見れば

言葉を第三者と共有し第三者もまた自己の体験や心情に即して共感するという想定を組み込んでいないということでもあろう。

挽歌の言葉は必ずしも死者に向けられているわけではない。それは、挽歌の基調が、死者に向けた招魂でもなく鎮魂でもなく、また死者に向けた純直な訴えでもなく、歌の享受者を想定した文芸的志向に基づくことに拠っている。

ただし挽歌の中でも、行路死者や異常死者を歌うもの、殯や葬送に直接的に関わる歌などには、死者への呼びかけ表現が見られるものもある。これらの歌では、呼びかけの言葉を組み込むことによって、眼前の死者に歌いかける表現が成り立っている。

(二〇一八年九月二十日受理)